

注 意 事 項

1. 試験問題の数は60問で解答時間は正味2時間30分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。

(1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを(例1)では一つ、(例2)では二つ選び答案用紙に記入すること。

(例1) 101 県庁所在地はどれか。 (例2) 102 県庁所在地はどれか。

はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

2つ選べ。

- a 宇都宮市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

(例1)の正解は「c」であるから答案用紙の

101 ☐a ☐b ☒c ☐d ☐e のうち ☒c をマークして

101 ☐a ☐b ☒c ☐d ☐e とすればよい。

(例2)の正解は「a」と「c」であるから答案用紙の

102 ☒a ☐b ☒c ☐d ☐e のうち ☒a と ☒c をマークして

102 ☒a ☐b ☒c ☐d ☐e とすればよい。

- (2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例…… ☒ (濃くマークすること。)

悪い解答の例…… ☐ ☐ (解答したことにならない。)

- (3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「☒」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。

- (4) ア. (例1)の質問には二つ以上解答した場合は誤りとする。

イ. (例2)の質問には一つ又は三つ以上解答した場合は誤りとする。

- (5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 19歳の女性。月経が3週遅れ、市販の試薬による妊娠診断検査が陽性となったため受診した。子宮は前傾前屈、ほぼ正常大、軟。両側付属器は触知しない。経膈超音波検査で子宮内膜厚14mm、子宮腔内にエコーフリースペースを認めない。子宮の左外側に径25mmの嚢胞様病変を認め、内部に規則的拍動を認める。Douglas窩には異常を認めない。

対応として適切なのはどれか。

(1) CA125測定

(2) 子宮頸部細胞診

(3) 子宮内膜組織診

(4) メソトレキセート投与

(5) 腹腔鏡下手術

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

2 20歳の初産婦。妊娠39週に規則的な陣痛発来で受診し、早朝に入院した。現在までの妊娠経過で異常の指摘はない。入院時所見：意識は清明。身長155 cm、体重56 kg。体温36.7℃。脈拍84/分、整。血圧130/78 mmHg。Leopold 診察法で胎児は第1頭位であり、児頭は骨盤内に固定していた。内診所見：子宮口開大4 cm、展退度80%、児頭下降度SP-2 cm。少量の性器出血があったが、破水は認めなかった。超音波検査による胎児推定体重は3,300 gであった。入院後胎児心拍数陣痛モニター下に経過をみていたが、翌朝の内診所見は子宮口開大6 cm、展退度90%、児頭下降度SP±0 cm、未破水であった。その時の胎児心拍数陣痛図(別冊No. 1)を別に示す。

対応として適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 骨盤計測
- c 陣痛促進
- d 吸引分娩
- e 帝王切開

別 冊
No. 1 図

3 2歳2か月の男児。仙骨部の皮下腫瘍を主訴に来院した。腫瘍は出生時から認められ定期的に受診している。ひとり歩き1歳3か月。身長80 cm、体重11 kg。頭囲48 cm。言語発達に異常を認めない。腫瘍は径5 cmの半球状で、正常な皮膚に覆われている。腰仙部MRIのT₁強調正中矢状断像(別冊No. 2)を別に示す。

診断はどれか。

- a 奇形腫
- b 骨軟骨腫
- c 脊髄血管腫
- d 脊髄腫瘍
- e 二分脊椎

別 冊
No. 2 写真

4 43歳の女性。職場の産業医からの紹介状を持参して来院した。紹介状によると、主訴は不眠で、上司によれば業務はとどこおりなく遂行できているが、このところ口数が少なくなっており、はなはだ暗い雰囲気に見えるとのことである。診察時の最初の質問として「一番お困りのことは？」と訊ねたところ、患者は「夜中に目が覚めやすいことです」と答えた。

この後に続ける質問として最も適切なのはどれか。

- a 職場で悩みごとはありませんか。
- b 昼間の体調やご気分はいかがですか。
- c ご自分ではどんな病気だとお感じですか。
- d 上司はあなたが受診することをご存知ですか。
- e ご家族やご親戚で精神科を受診された方はいませんか。

5 25歳の女性。突発する動悸、めまい及び呼吸困難を主訴に来院した。症状は1か月前の運転中に起こり、その後同様の症状をたびたび経験するようになった。同時に「このまま死んでしまうかもしれない」という恐怖感に襲われるという。尿、血液および血清生化学所見に異常を認めない。心電図、胸部エックス線写真、頭部MRI及び脳波に異常を認めない。

この疾患でよくみられるのはどれか。

- (1) 強迫観念
- (2) 広場恐怖
- (3) 予期不安
- (4) 心気妄想
- (5) けいれん発作

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

6 5歳の男児。会話が成立しないことを心配した母親に連れられて来院した。乳児期から喃語が少なく、視線が合わなかった。3歳児健康診査では運動発達に問題はないが、言葉の遅れを指摘された。母親によると、着衣、道順および物の並び方がいつもと違うと興奮して暴れ、水に触って奇声をあげるという。診察中、問いかけには答えず、鉄道の駅名を次々に言いながら回転椅子を回し続けている。

最も考えられるのはどれか。

- a 小児自閉症
- b 知的発達障害
- c パニック障害
- d Asperger 症候群
- e 注意欠陥多動性障害

7 23歳の男性。色素斑を気にして来院した。幼児期から口唇と掌蹠とに小色素斑が散在する。口唇の写真(別冊No. 3)を別に示す。

この疾患で異常がみられるのはどれか。

- a 骨
- b 中枢神経
- c 心臓
- d 肝臓
- e 腸管

別冊
No. 3 写真

8 54歳の男性。腋窩と頸部との皮膚のざらつきと痒みとを主訴に来院した。腋窩部の写真(別冊No. 4A)と腋窩部皮疹の病理組織H-E染色標本(別冊No. 4B)とを別に示す。

基礎疾患として考えられるのはどれか。

- (1) 肝硬変
- (2) 糖尿病
- (3) 悪性腫瘍
- (4) 悪性貧血
- (5) Basedow 病

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 4 写真A、B

9 46歳の女性。左眼の眼瞼下垂を訴えて来院した。9方向眼位と輻湊との写真(別冊No. 5)を別に示す。

異常がみられないのはどれか。

- a 上直筋
- b 下直筋
- c 内直筋
- d 外直筋
- e 上眼瞼挙筋

別 冊
No. 5 写 真

10 62歳の男性。3か月前から右眼が見えにくくなり改善しないため来院した。1年前に右眼の眼底出血を指摘され、内服薬で治療中である。視力は右手動弁(矯正不能)、左0.4(1.2×-2.00D)。眼圧は右12mmHg、左12mmHg。角膜と水晶体とに異常を認めない。血圧144/72mmHg。HbA_{1c}6.5%(基準4.3~5.8)。右眼の眼底写真(別冊No. 6A)、左眼の眼底写真(別冊No. 6B)および右眼の超音波写真(別冊No. 6C)を別に示す。

右眼の視力回復のための治療として最も適切なものはどれか。

- a 血糖コントロール
- b 血圧コントロール
- c 止血薬投与
- d レーザー光凝固
- e 硝子体手術

別 冊
No. 6 写真A、B、C

11 42歳の女性。難聴を主訴に来院した。以前から軽度の難聴を自覚していたが、4、5年前から増悪し、耳鳴りも出現するようになった。耳疾患の既往はない。鼻腔、咽喉頭および鼓膜に異常所見を認めない。オーディオグラム(別冊No. 7)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 耳小骨離断
- b 耳硬化症
- c 滲出性中耳炎
- d 聴神経腫瘍
- e 機能性難聴

別 冊
No. 7 図

12 56歳の男性。呼吸困難と嚥下痛のため来院した。昨日から咽頭痛があり、今朝から呼吸困難が出現した。吸気性喘鳴を聴取する。喉頭内視鏡写真(別冊No. 8)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 伝染性単核球症
- b 急性喉頭蓋炎
- c 喉頭乳頭腫
- d 声帯嚢胞
- e 反回神経麻痺

別 冊
No. 8 写 真

13 65歳の男性。咽頭の違和感と嚥下痛とを訴えて来院した。喉頭内視鏡写真(別冊No. 9)を別に示す。生検の結果は分化型扁平上皮癌であった。

この患者で正しいのはどれか。

- a 発症にEBウイルスが関与する。
- b 頸部リンパ節転移はまれである。
- c 放射線治療は無効である。
- d 輪状咽頭筋切除術を行う。
- e 腫瘍摘出後、再建手術が必要である。

別冊
No. 9 写真

14 58歳の女性。労作時の息切れを主訴に来院した。ばち指を認める。両下肺野に連続性の血管雑音を聴取し、深吸気で増強する。胸部エックス線写真(別冊No. 10A)と右肺動脈造影写真(別冊No. 10B)とを別に示す。

この疾患の合併症として特徴的でないのはどれか。

- a 咯血
- b 膿胸
- c 脳膿瘍
- d 脳梗塞
- e 脳出血

別冊
No. 10 写真A、B

15 32歳の女性。咳嗽を主訴に来院した。半年ほど前から、ほぼ毎日、明け方に咳嗽、喘鳴および呼吸困難が出現するようになった。日中には症状は軽快し、軽度の咳嗽のみが認められる。胸部聴診で wheezes を聴取しない。スパイロメトリ：%VC 95 %、FEV_{1.0} % 82 %。

非発作時の治療で最も適切なのはどれか。

- a 経口β刺激薬
- b 経口テオフィリン薬
- c 吸入β刺激薬
- d 吸入抗コリン薬
- e 吸入副腎皮質ステロイド薬

16 70歳の男性。住民検診で胸部異常陰影を指摘され精密検査のため来院した。自覚症状はない。身長 165 cm、体重 68 kg。胸部の身体所見に異常はない。血液検査に異常を認めない。誘発喀痰の結核菌検査と細胞診とは陰性である。胸部単純CTで孤立性結節を認める。結節内に石灰化を認めない。肺野条件の胸部単純CT(別冊No. 11)を別に示す。

診断確定に最も有用な検査はどれか。

- a 胸部造影MRI
- b 気管支動脈造影
- c ガリウムシンチグラフィ
- d 経気管支肺生検
- e CTガイド下針生検

別冊
No. 11 写真

17 58歳の女性。入浴時、乳房に腫瘤を触知したため来院した。左乳房外側上部に径1.3cmの辺縁不整な腫瘤を触知する。乳頭と皮膚とに陥凹はなく、えくぼ徴候(dimpling sign)も認めない。左腋窩リンパ節を触知しない。乳房エックス線単純撮影(マンモグラフィ)と乳腺超音波検査とで、触知する腫瘤に一致して微小石灰化を伴う陰影を認める。生検の結果は浸潤性乳管癌であった。

治療として適切なのはどれか。

- a 抗癌化学療法
- b ホルモン療法
- c 手術
- d 放射線治療
- e 免疫療法

18 29歳の男性。日中の眠気を主訴に来院した。1年前から睡眠中の激しいいびきと無呼吸とを家族に指摘されていた。最近、日中の眠気が強くなり、勤務に支障をきたしている。身長160cm、体重95kg。両側口蓋扁桃のⅡ度の腫大を認める。

予想されるのはどれか。

- (1) 血圧上昇
- (2) 赤血球増加
- (3) PaCO_2 低下
- (4) 機能的残気量増加
- (5) 横隔膜低位

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

19 13歳の男子。脈の不整を指摘され来院した。自覚症状はない。成長・発達に異常はない。体温36.5℃。脈拍60/分、不整。心雑音は聴取しない。呼吸音は正常である。腹部に異常を認めない。心電図(別冊No. 12)を別に示す。

診断はどれか。

- a 洞房ブロック
- b 房室ブロックⅠ度
- c 房室ブロックⅡ度
- d 房室ブロックⅢ度
- e 完全右脚ブロック

別冊
No. 12 図

20 7歳の女児。学校健診で心雑音を指摘されたため来院した。生来かぜをひきやすい。身長120 cm、体重25 kg。脈拍84/分、整。血圧96/72 mmHg。第3肋間胸骨左縁に2/6度の収縮期雑音を聴取する。血液所見：赤血球370万、Hb 11.7 g/dl、Ht 35 %。心カテーテル検査所見を表に示す。

	圧 (mmHg)	酸素飽和度 (%)
上大静脈	5	64
右 房	5	78
右 室	28	82
肺動脈	25/15	81
大動脈	90/68	97

診断はどれか。

- a 心房中隔欠損症
- b 心室中隔欠損症
- c 動脈管開存症
- d Fallot 四徴症
- e Ebstein 奇形

21 34歳の男性。労作時の息切れを主訴に来院した。意識は清明。身長185 cm、体重58 kg。脈拍92/分、整。血圧162/48 mmHg。四肢は細長く、口蓋は高い。胸骨左縁第4肋間に3/6度の収縮期・拡張期(to and fro)雑音を聴取する。

診断はどれか。

- a 僧帽弁狭窄症
- b 僧帽弁閉鎖不全症
- c 大動脈弁閉鎖不全症
- d 大動脈弁狭窄症
- e 三尖弁閉鎖不全症

22 57歳の男性。労作時呼吸困難のために来院した。1か月前から労作時の呼吸困難と全身倦怠感を自覚するようになった。既往歴に特記すべきことはない。意識は清明。身長176 cm、体重75 kg。脈拍80/分、整。血圧120/80 mmHg。拡張期心雑音2/6度を聴取する。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤沈79 mm/1時間、赤血球423万、Hb 13.3 g/dl、Ht 40 %、白血球5,600、血小板26万。CRP 3.8 mg/dl。心エコー図(別冊No. 13)を別に示す。

この疾患について正しいのはどれか。

- (1) 左房内に発生する頻度が高い。
- (2) 保存的治療が第一選択である。
- (3) 組織学的には悪性が多い。
- (4) 体位によって症状が変化する。
- (5) 合併症に塞栓症がある。

- a (1)、(2)、(3) b (1)、(2)、(5) c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4) e (3)、(4)、(5)

別 冊
No. 13 写 真

23 67歳の男性。今朝、胸背部痛が突然出現したため救急車で搬送された。5年前から高血圧を指摘され治療を受けていた。身長168 cm、体重76 kg。呼吸数20/分。脈拍96/分、整。血圧は右上肢186/68 mmHg、左上肢94/50 mmHg。顔貌は苦悶様。胸部では、Ⅲ音と第3肋間胸骨左縁に最強点を有する拡張期雑音とを聴取する。呼吸音は正常。腹部は平坦、軟。下腿に浮腫を認めない。血液所見：赤血球375万、Hb 10.6 g/dl、Ht 34%、白血球12,800、血小板10万。血清生化学所見：AST 38単位、ALT 35単位、LDH 648単位(基準176~353)、CK 78単位(基準10~40)。CRP 8.5 mg/dl。心電図(別冊No. 14A)と胸部造影CT(別冊No. 14B)とを別に示す。

行うべき治療はどれか。

- (1) 三尖弁置換術
- (2) 僧帽弁置換術
- (3) 大動脈弁形成術
- (4) 上行大動脈置換術
- (5) 心室中隔穿孔閉鎖術

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊

No. 14 図A、写真B

24 51歳の男性。嚥下困難と体重減少とを主訴に来院した。6年前から食物のつかえ感を自覚していた。最近症状の悪化があり、体重が1か月で5 kg減少した。身長169 cm、体重47 kg。胸腹部に異常所見を認めない。血液所見：赤血球384万、Hb 11.5 g/dl、Ht 34%、白血球7,500。血清生化学所見：総蛋白6.1 g/dl、アルブミン3.7 g/dl、尿素窒素12 mg/dl、クレアチニン0.6 mg/dl、AST 19単位、ALT 21単位。上部消化管造影写真(別冊No. 15)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 男性に多い。
- b 嘔声をきたす。
- c 吐血することが多い。
- d 嚥下性弛緩反応がない。
- e 胃液の逆流によって発生する。

別冊

No. 15 写真

25 生後7日の新生児。嘔吐を主訴に来院した。在胎40週、3,800gで出生。胎便排泄は順調で母乳の飲みも良好であった。8時間前からミルクを嘔吐するようになり、吐物に胆汁が混じるようになった。2時間前から次第に腹部が膨満し、30分前からあえぐような呼吸になっている。体温37.2℃。呼吸数50/分。心拍数132/分、整。顔色は不良。腹部は膨満し、上腹部を触れると嫌がって顔をしかめる。

最も考えられるのはどれか。

- a 肥厚性幽門狭窄症
- b 腸回転異常症
- c 腸重積症
- d 新生児壊死性腸炎
- e Hirschsprung病

26 62歳の男性。血便を主訴に来院した。悪心、嘔吐および腹痛はなく、排便は1行/日である。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。血液所見：赤血球380万、Hb12.1g/dl、白血球5,800、血小板24万。血清生化学所見：総蛋白7.8g/dl、尿素窒素21mg/dl、総コレステロール198mg/dl、総ビリルビン0.8mg/dl、AST28単位、ALT22単位。注腸造影写真(別冊No.16)を別に示す。

上昇が予想されるのはどれか。

- (1) CEA
- (2) CA19-9
- (3) SCC
- (4) PSA
- (5) PIVKA-II

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No.16 写真

27 47歳の男性。健康診断で肝機能異常を指摘され来院した。32歳時に輸血歴があるが明らかな急性肝炎の既往はない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。血清生化学所見：AST75単位、ALT126単位。免疫学所見：HBs抗原陰性、HCV抗体陽性、HCV-RNA240KIU/ml、HCVセロタイプグループ1。抗核抗体陰性。腹部超音波検査では肝辺縁は鋭、表面平滑で占拠性病変はなく、脾腫を認めない。

治療薬として適切なのはどれか。

- (1) インターフェロン
- (2) プレドニゾロン
- (3) ラクツロース
- (4) ラミブジン
- (5) リバビリン

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

28 58歳の男性。健康診断で肝の占拠性病変を指摘され来院した。毎年輕度の肝機能異常を指摘されていたが、無症状のため放置していた。30歳時に輸血を受けた。血液所見：赤血球375万、Hb12.0g/dl、Ht34%、白血球4,500、血小板13万、プロトロンビン時間73%(基準80~120)。血清生化学所見：総ビリルビン0.9mg/dl、AST73単位、ALT63単位。腹部超音波検査で、肝右葉に、周囲に低エコー帯を伴い内部がモザイク状の径5cmの腫瘤を認める。

最も考えられるのはどれか。

- a 肝包虫症
- b 肝血管腫
- c 肝細胞癌
- d 胆管細胞癌
- e 転移性肝癌

29 42歳の男性。大量飲酒し3時間後に激しい上腹部痛と嘔吐とをきたしたため来院した。血液所見：赤血球450万、白血球13,000、血小板18万。血清生化学所見：尿素窒素15mg/dl、クレアチニン0.9mg/dl、総ビリルビン0.7mg/dl、AST42単位、ALT25単位、アルカリホスファターゼ230単位(基準260以下)、 γ -GTP82単位(基準8~50)、アミラーゼ1,060単位(基準37~160)。

診断に最も有用なのはどれか。

- a 上部消化管内視鏡検査
- b 内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)
- c 上部消化管造影
- d 腹部CT
- e 腹部血管造影

30 77歳の女性。今朝から腹痛と左大腿内側部痛とが出現したため来院した。昨夜から悪心と嘔吐とが続いている。26歳時に帝王切開の既往がある。腹部はやや膨隆し、腸雑音の亢進を認める。肝・脾を触知しない。血液所見：赤血球378万、Hb10.8g/dl、Ht34%、白血球8,100、血小板17万。血清生化学所見：総蛋白6.2g/dl、アルブミン3.0g/dl、AST30単位、ALT25単位、LDH410単位(基準176~353)、アルカリホスファターゼ230単位(基準260以下)。CRP2.5mg/dl。骨盤部造影CT(別冊No.17)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 臍ヘルニア
- b 鼠径ヘルニア
- c 大腿ヘルニア
- d 閉鎖孔ヘルニア
- e 腹壁癒痕ヘルニア

別冊
No. 17 写真

31 60歳の女性。昼食後に下腹部痛があり来院した。意識は清明。体温36.7℃。脈拍68/分、整。血圧120/64mmHg。顔貌は苦悶様。腹部は平坦で、腸雑音はやや亢進している。右下腹部に圧痛があるが腹膜刺激症状はない。血液所見：赤血球405万、Hb13.8g/dl、Ht35%、白血球10,000、血小板17万。血清生化学所見：総蛋白6.3g/dl、アルブミン3.2g/dl、AST32単位、ALT27単位、LDH430単位(基準176~353)、アルカリホスファターゼ240単位(基準260以下)。CRP3.5mg/dl。腹部造影CT(別冊No.18A、B)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 虫垂炎
- b 大腸憩室症
- c 腸結核
- d 腸重積症
- e 盲腸軸捻転症

別冊
No. 18 写真A、B

32 30歳の男性。上腹部の違和感を訴えて来院した。2週前、乗用車を運転中に交通事故を起こし、ハンドルで腹部を強打した。上腹部に圧痛を伴う表面平滑な腫瘤を触れる。腹部超音波検査で膵頭部に径8cm大の嚢胞性病変を認める。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 破裂しない。
- b 自然消失しない。
- c 膵癌を合併しやすい。
- d 嚢胞内容の主成分は粘液である。
- e 血清アミラーゼ値が上昇する。

33 74歳の男性。発熱、咳および易疲労感のため来院した。3か月前から疲れやすさを自覚していたが、4日前から38℃台の発熱と咳とが出現した。意識は清明。体温38.6℃。脈拍96/分、整。血圧138/82 mmHg。眼瞼結膜は蒼白。右下肺野にcoarse cracklesを聴取する。血液所見：赤血球210万、Hb 7.2 g/dl、Ht 22%、網赤血球6%、白血球3,000(桿状核好中球3%、分葉核好中球46%、好酸球2%、好塩基球3%、単球12%、リンパ球34%)、血小板8.2万。血清生化学所見：総蛋白6.5 g/dl、アルブミン4.0 g/dl、尿素窒素22 mg/dl、クレアチニン1.6 mg/dl、尿酸8.3 mg/dl、総コレステロール126 mg/dl、総ビリルビン0.8 mg/dl、AST 40単位、ALT 35単位、LDH 520単位(基準176~353)、Na 140 mEq/l、K 4.2 mEq/l、Fe 260 µg/dl、フェリチン340 ng/ml(基準20~120)。CRP 3.4 mg/dl。骨髓血塗抹鉄染色標本(別冊No. 19)を別に示す。

この疾患について正しいのはどれか。

- (1) 白血球機能異常はない。
- (2) 無効造血がみられる。
- (3) 2相性赤血球がみられる。
- (4) 白血病に移行することはない。
- (5) Philadelphia 染色体がみられる。

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 19 写真

34 71歳の男性。感冒症状のため近医を受診した際に赤沈の亢進を指摘され、精査のため来院した。3年前に大腸ポリープの内視鏡切除術を受けた。自覚症状はなく、全身状態も良好である。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤沈45 mm/1時間、赤血球435万、Hb 14.7 g/dl、Ht 43%、白血球7,100、血小板19万。血清生化学所見：総蛋白8.2 g/dl、アルブミン4.3 g/dl、IgG 2,235 mg/dl(基準960~1,960)、IgA 356 mg/dl(基準110~410)、IgM 150 mg/dl(基準65~350)、尿素窒素12 mg/dl、クレアチニン1.0 mg/dl、総ビリルビン0.9 mg/dl、AST 20単位、ALT 18単位、LDH 243単位(基準176~353)。CRP 0.1 mg/dl。血清免疫電気泳動写真(別冊No. 20)を別に示す。

対応として適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 化学療法
- c ステロイドパルス療法
- d 血漿交換
- e 自家造血幹細胞移植

別冊
No. 20 写真

35 65歳の男性。感冒症状のため近医を受診したところ、蛋白尿を指摘され精査のため来院した。尿所見：蛋白3+、糖(-)、潜血2+、沈渣に赤血球10~20/1視野、白血球3~5/1視野。血液所見：赤血球400万、Hb 13.0 g/dl、Ht 39%。血清生化学所見：空腹時血糖 90 mg/dl、総蛋白 6.4 g/dl、アルブミン 4.0 g/dl、尿素窒素 32 mg/dl、クレアチニン 4.0 mg/dl、尿酸 8.0 mg/dl、総コレステロール 200 mg/dl。腹部超音波検査で腎臓の萎縮を認めない。腎生検の光顕PAS染色標本(別冊No. 21)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 巣状糸球体硬化症
- b Alport 症候群
- c 顕微鏡型多発血管炎
- d 糖尿病性腎症
- e 骨髄腫腎

別冊
No. 21 写真

36 22歳の女性。脱力感と手のしびれとを主訴に来院した。意識は清明。身長 160 cm、体重 38 kg。体温 36.5℃。脈拍 76/分、整。血圧 94/50 mmHg。浮腫を認めない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血(-)、沈渣に異常を認めない。血液所見：赤血球 390 万、Hb 13.2 g/dl、Ht 36%、白血球 7,000、血小板 30 万。血清生化学所見：総蛋白 7.0 g/dl、アルブミン 4.5 g/dl、尿素窒素 16 mg/dl、クレアチニン 0.8 mg/dl、総コレステロール 160 mg/dl、トリグリセライド 90 mg/dl、AST 21 単位、ALT 18 単位、 γ -GTP 30 単位(基準 8~50)、Na 147 mEq/l、K 2.5 mEq/l、Cl 101 mEq/l、Ca 9.0 mg/dl、P 3.0 mg/dl、Mg 1.2 mg/dl(基準 1.6~2.6)。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.48、PaO₂ 96 Torr、PaCO₂ 47 Torr、HCO₃⁻ 34 mEq/l。血漿レニン活性 7 ng/ml/時間(基準 1.2~2.5)、アルドステロン 50 ng/dl(基準 5~10)、尿中カルシウム・クレアチニン排泄比 0.1 以下(基準 0.1~0.2)。

最も考えられるのはどれか。

- a 原発性アルドステロン症
- b Fanconi 症候群
- c Bartter 症候群
- d Gitelman 症候群
- e Liddle 症候群

37 50歳の女性。半年前からの頻尿と尿失禁のため来院した。3年前からうつ症状があり、複数の向精神薬を服用している。下腹部正中に緊満した半球状の腫瘤を触知する。

尿失禁のタイプで可能性が最も高いのはどれか。

- a 切迫性
- b 真性
- c 腹圧性
- d 機能性
- e 溢流性

38 72歳の男性。数か月前から両下肢のしびれと排尿困難とが出現し、徐々に症状が悪化してきたため来院した。神経学的所見では両下肢に筋力低下と表在感覚鈍麻とを認める。導尿で300 mlの残尿を認めたが尿所見に異常はなかった。血液所見：赤血球360万、白血球6,300、血小板20万。血清生化学所見：尿素窒素35 mg/dl、クレアチニン1.5 mg/dl、Na 141 mEq/l、K 5.0 mEq/l、Cl 119 mEq/l、アルカリホスファターゼ610単位(基準260以下)。PSA 470 ng/ml(基準4.0以下)。腰椎エックス線単純撮影で第4腰椎に圧迫骨折を認める。骨シンチグラフィで第4腰椎と左右の肋骨の数か所とにhot spotを認める。前立腺生検の結果は、低分化腺癌であった。

優先すべき治療はどれか。

- (1) エストロゲン薬投与
- (2) 第4腰椎放射線照射
- (3) 去勢術
- (4) 椎弓切除術
- (5) 前立腺全摘除術

- | | | |
|---------------|---------------|---------------|
| a (1)、(2)、(3) | b (1)、(2)、(5) | c (1)、(4)、(5) |
| d (2)、(3)、(4) | e (3)、(4)、(5) | |

39 35歳の女性。1回経妊、1回経産。月経痛と挙児希望とを主訴に来院した。子宮は硬く手拳大に腫大し、付属器は触知しない。血中CA125値124単位(基準35以下)。骨盤部単純MRIのT₂強調矢状断像(別冊No. 22)を別に示す。

診断はどれか。

- a 子宮筋腫
- b 子宮腺筋症
- c 子宮内膜増殖症
- d 子宮体癌
- e 子宮肉腫

別冊
No. 22 写真

40 22歳の女性。未経産。胞状奇胎娩出後の管理目的で来院した。8週前に胞状奇胎(妊娠9週)と診断され、子宮内容除去術を受けた。腔分泌物は血性、少量。子宮体部は軽度腫大し、付属器は触知しない。基礎体温は1相性。尿中hCG値1,600 mIU/ml。経腔超音波写真(別冊No. 23A)を別に示す。胸部エックス線写真で右下肺野に径15 mmの結節陰影を1個認める。頭部CTと腹部CTとに異常を認めない。奇胎娩出から8週間の尿中hCG値の推移(別冊No. 23B)を別に示す。

治療として最も適切なものはどれか。

- a 子宮病巣摘出術
- b 単純子宮全摘術
- c 肺病巣摘出術
- d 放射線治療
- e 化学療法

別冊
No. 23 写真A、図B

41 30歳の女性。挙児を希望して来院した。26歳で結婚し、避妊していなかったが妊娠に至らない。初経12歳。月経周期28日型、整。月経痛は認めない。24歳時、右卵管妊娠で卵管温存手術を受けた。身長158cm、体重45kg。子宮は正常大で、両側付属器は触知しない。基礎体温は2相性。血中ホルモン値(月経周期7日目): LH 4.8 mIU/ml (基準1.8~7.6)、FSH 8.1 mIU/ml (基準5.2~14.4)、プロラクチン 6.2 ng/ml (基準15以下)、エストラジオール 34 pg/ml (基準11~230)、プロゲステロン 0.2 ng/ml (基準0.5以下)、テストステロン 42 ng/ml (基準30~90)。子宮卵管造影写真(別冊No. 24)を別に示す。夫の精液検査所見: 量 2.5 ml、精子濃度 $8 \times 10^6/\text{ml}$ 、運動率 55%、奇形率 15%。

不妊の原因として考えられるのはどれか。

- (1) 乏精子症
- (2) 双角子宮
- (3) 子宮腔癒着症
- (4) 多嚢胞卵巣症候群
- (5) 卵管留水腫

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 24 写真

42 13歳の男子。学校検尿で微少血尿を指摘され来院した。浮腫と乏尿とには気付いていない。血圧108/62 mmHg。眼瞼に浮腫を認めない。心肺に異常はない。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。尿所見: 蛋白(—)、糖(—)、沈渣に赤血球 5~10/1視野。血液所見: 赤血球 424 万、Hb 12.4 g/dl、白血球 8,200。血清生化学所見: 尿素窒素 15 mg/dl、クレアチニン 0.6 mg/dl、Na 142 mEq/l、K 4.4 mEq/l、Cl 104 mEq/l。腹部造影 CT(別冊No. 25)を別に示す。家族内に同様の CT 所見を示す者がいる。

この疾患について正しいのはどれか。

- a 常染色体劣性遺伝である。
- b 皮膚に結節性病変がみられる。
- c 肝に同様の病変がみられる。
- d 難聴の合併が多い。
- e 予後は良好である。

別冊
No. 25 写真

43 75歳の女性。自宅で昼食の準備中、突然ボーッとし、左口角からよだれを垂らし左半身に力が入らず立っていられなくなったため、救急車で搬送された。意識は清明。身長156 cm、体重62 kg。体温36.2℃。呼吸数18/分。脈拍104/分、不整。血圧180/100 mmHg。皮膚色は正常で、貧血と黄疸とはない。胸部にラ音を聴取しない。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。下肢に浮腫を認めない。顔面を含む左片麻痺、左半側空間失認および病態失認を認める。血液所見：赤血球450万、Hb12.2 g/dl、白血球6,000、血小板21万。血清生化学所見：総蛋白6.2 g/dl、アルブミン4.2 g/dl、尿素窒素16 mg/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、総コレステロール160 mg/dl、トリグリセライド100 mg/dl、AST25単位、ALT21単位、Na138 mEq/l、K4.0 mEq/l。心電図で心房細動を認める。頭部単純CTで明らかな異常を認めない。

最も考えられるのはどれか。

- a 被殻出血
- b ラクナ梗塞
- c くも膜下出血
- d 心原性脳塞栓症
- e アテローム血栓性脳梗塞

44 59歳の男性。頭痛と吐き気とを主訴に来院した。1か月前から頭痛と吐き気とがあり、徐々に増悪してきた。意識は清明。身長168 cm、体重45 kg。呼吸数18/分。脈拍92/分、整。血圧110/82 mmHg。貧血と黄疸とを認めない。胸部にラ音を聴取しない。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。下肢に浮腫を認めない。眼底検査でうっ血乳頭を認める。頭部単純MRIのT₁強調像(別冊No. 26A)と造影MRIのT₁強調像(別冊No. 26B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 髄膜腫
- b 神経膠腫
- c 神経鞘腫
- d 髄膜癌腫症
- e 転移性脳腫瘍

別 冊
No. 26 写真A、B

45 62歳の男性。2年ほど前から歩行時のふらつき、ろれつの回りにくさ及び排尿困難がみられ、徐々に増悪するため来院した。意識は清明。身長158 cm、体重67 kg。体温36.0℃。呼吸数16/分。脈拍84/分、整。血圧130/72 mmHg。胸部にラ音を聴取しない。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。下肢に浮腫を認めない。知能は正常である。言語は不明瞭で、頸部・四肢に筋固縮を認める。四肢の協調運動と歩行とに小脳性運動失調を認める。四肢筋力と表在・深部感覚とは正常である。頭部単純MRIのT₂強調像(別冊No. 27)を別に示す。

この疾患の症候としてまれなのはどれか。

- a 無 動
- b 嚥下障害
- c 安静時振戦
- d 起立性低血圧
- e 深部(腱)反射亢進

別 冊
No. 27 写 真

46 14歳の男子。右肘部痛を主訴に来院した。8歳から野球のリトルリーグに所属し、1日4時間の投球練習を毎日行ってきた。6か月前からボールを投げる動作時に右肘部の痛みを自覚していた。疼痛が改善しないため近医を受診し、右肘関節エックス線単純写真で異常陰影を指摘されていた。身長165 cm、体重64 kg。右肘関節外側に軽度の腫脹と圧痛とを認める。関節可動域は、屈曲105°、伸展-20°である。屈曲伸展運動で、ひっかかり感がある。右肘関節エックス線単純写真正面像(別冊No. 28)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 疲労骨折
- b Ewing 肉腫
- c 慢性骨髓炎
- d 離断性骨軟骨炎
- e 上腕骨顆上骨折

別 冊
No. 28 写 真

47 88歳の女性。右大腿部の疼痛を主訴に家族に伴われて来院した。2日前、自宅の玄関で履物を脱いでいるとき転倒した。直後は痛かったが、その後歩けるようになった。しかし、歩行時の痛みは軽快しない。右股関節に軽度の運動痛はあるが可動域はほぼ正常である。右股関節エックス線単純写真で明らかな骨折はみられない。

対応として適切なのはどれか。

- a 心配ないので歩行訓練を行うよう説明する。
- b 痛みが取れるまで安静臥床を保つよう説明する。
- c 確定診断のためにMRIが必要と説明する。
- d 骨折している可能性があるのでギプス固定が必要と説明する。
- e 骨折している可能性があるので内固定術が必要と説明する。

48 46歳の女性。発汗と頭痛とを主訴に来院した。眉弓部の突出と鼻・口唇の肥大とを認める。血清成長ホルモン値 28 ng/ml (基準 5 以下)。

この患者にみられないのはどれか。

- a 高血圧
- b 糖尿病
- c 尿路結石
- d 低リン血症
- e 変形性膝関節症

49 36歳の女性。1週間から顔面が腫れぼったい感じがするため来院した。1年前に健診で甲状腺腫を指摘され、精査を受けたが甲状腺機能は正常であった。1か月前から全身倦怠感があり、何をするにも気力がなくなった。意識は清明。身長 158 cm、体重 62 kg。体温 35.8℃。脈拍 60/分、整。血圧 100/52 mmHg。顔面に浮腫を認める。頸部に横径 5 cm の弾性硬、びまん性の甲状腺腫を認める。圧痛はない。下腿に圧痕を残さない浮腫を軽度認める。血清生化学所見：TSH 60 μ U/ml (基準 0.2~4.0)、 T_3 82 ng/dl (基準 80~220)、 T_4 2.0 μ g/dl (基準 5~12)、FT $_4$ 0.3 ng/dl (基準 0.8~2.2)。免疫学所見：抗サイログロブリン抗体 8.0 U/ml (基準 0.3 以下)、抗 TSH 受容体抗体 0.5 % (基準 10 以下)。

この患者の治療薬で適切なのはどれか。

- a サイロキシン
- b トリヨードサイロニン
- c 副腎皮質ステロイド薬
- d フロセミド
- e 無機ヨード

50 53歳の女性。1週間からの目のかすみを主訴に来院した。20年前に健康診断で糖尿病を指摘され、15年前から経口血糖降下薬で治療されている。1年前から全身倦怠感があり、1か月前から階段昇降時に息切れがある。意識は清明。身長 158 cm、体重 52 kg。脈拍 88/分、整。血圧 162/102 mmHg。眼瞼結膜は蒼白であるが、眼球結膜に黄染は認めない。下腿に浮腫を認める。尿所見：蛋白 2+、糖 1+、ケトン体(-)、潜血(-)。血液所見：赤血球 240 万、Hb 8.0 g/dl、Ht 25 %、白血球 7,200、血小板 18 万。血清生化学所見：空腹時血糖 220 mg/dl、HbA $_1$ c 8.5 % (基準 4.3~5.8)、総蛋白 5.8 g/dl、アルブミン 2.5 g/dl、尿素窒素 52 mg/dl、クレアチニン 5.6 mg/dl、総コレステロール 280 mg/dl、トリグリセライド 230 mg/dl、AST 32 単位、ALT 24 単位、アルカリホスファターゼ 420 単位 (基準 260 以下)、アミラーゼ 220 単位 (基準 37~160)、Na 138 mEq/l、K 4.9 mEq/l、Cl 105 mEq/l、Ca 7.5 mg/dl、P 7.2 mg/dl。動脈血ガス分析 (自発呼吸、room air)：pH 7.32、PaO $_2$ 80 Torr、PaCO $_2$ 24 Torr、HCO $_3^-$ 14 mEq/l。

治療方針で正しいのはどれか。

- a 摂取エネルギー制限の徹底
- b 摂取蛋白質の増量
- c 腎生検による診断の確定
- d インスリン治療への切り替え
- e 免疫抑制薬の追加

51 25歳の女性。反復する嘔吐と著しい体重減少とを主訴に来院した。重症妊娠悪阻の診断で緊急入院となった。絶食とし、糖質と電解質との輸液によって悪阻は軽減した。入院後3週目ころから急に、歩行がふらつき、物が二重に見えるようになり、会話内容も支離滅裂になった。意識は軽度混濁、見当識障害を認める。身長156 cm、体重39 kg。体温36.5℃。呼吸数18/分。脈拍88/分、整。血圧120/70 mmHg。皮膚色は正常。貧血と黄疸とを認めない。胸部にラ音を聴取しない。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。下腿に浮腫はない。眼振、眼球運動制限および歩行失調を認める。四肢麻痺、けいれん及び項部硬直はない。

最も考えられるのはどれか。

- a 子 癇
- b 多発性硬化症
- c 重症筋無力症
- d Wernicke 脳症
- e Guillain-Barré 症候群

52 23歳の女性。多関節痛のため来院した。昨年の冬から Raynaud 現象が出現した。妊娠中に手指の関節の腫脹と疼痛とが現れ、血圧の上昇と蛋白尿とを認めた。37週で出産し、新生児は健常である。出産後多関節痛は増悪し、全身倦怠感を伴った。意識は清明。身長159 cm、体重45 kg。体温36.5℃。脈拍72/分、整。血圧126/86 mmHg。眼瞼結膜に貧血はなく、眼球結膜に黄疸を認めない。頸部リンパ節腫脹を認める。心雑音なく、胸部にラ音を聴取しない。腹部に圧痛はなく、肝を触知しない。両手指の近位指節間関節と中手指節関節に対称的に腫脹と圧痛とを認める。尿所見：蛋白3+、糖(-)、潜血1+。血液所見：赤血球358万、Hb 10.1 g/dl、白血球3,500、血小板9万。血清生化学所見：総蛋白6.8 g/dl、アルブミン3.4 g/dl、クレアチニン0.5 mg/dl、AST 19単位、ALT 18単位、LDH 205単位(基準176~353)。免疫学所見：抗核抗体640倍(基準20以下)、CH50 20単位(基準30~40)。胸部エックス線写真に異常を認めない。

診断はどれか。

- a 全身性エリテマトーデス
- b 強皮症
- c 関節リウマチ
- d 寒冷凝集素症
- e Sjögren 症候群

53 10歳の男児。発熱と咽頭痛とを主訴に来院した。3日前から39℃の発熱と咽頭痛とがあった。体温39.2℃。脈拍92/分、整。発疹はない。心雑音はない。関節腫脹を認めない。イチゴ舌を認める。咽頭粘膜は発赤し、点状出血斑がある。両側口蓋扁桃に黄白色の滲出物が付着している。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血(-)。血液所見：赤血球480万、Hb12.5g/dl、Ht41%、白血球11,000(桿状核好中球16%、分葉核好中球56%、好酸球2%、リンパ球26%)、血小板30万。

CRP6.5mg/dl。咽頭培養：*Streptococcus pyogenes* 2+。

この疾患に続発するのはどれか。2つ選べ。

- a 川崎病
- b リウマチ熱
- c 急性糸球体腎炎
- d 若年性関節リウマチ
- e 全身性エリテマトーデス

54 67歳の女性。左上眼瞼が垂れ下がって見えにくいことを主訴に来院した。2か月前、左耳の痛みと痒みとがあり、耳介と外耳道とに小水疱を認めたが、特に治療せず2週ほどで軽快した。その後、左上眼瞼の下垂に気付いた。両側上眼瞼の挙筋力には左右差を認めない。両眼を閉じながら「いー」と発声しようとした時の顔面の写真(別冊No. 29)を別に示す。

原因微生物はどれか。

- a ボツリヌス菌
- b 黄色ブドウ球菌
- c インフルエンザ菌
- d 単純ヘルペスウイルス
- e 水痘・帯状疱疹ウイルス

別冊
No. 29 写真

55 12歳の男児。半年前から、ボーッと横になっていることが多くなり、家に引きこもるようになったため、母親に連れられて来院した。2歳時に麻疹に感染したという。診察時に、傾眠傾向にあり、ときおり右の上下肢にミオクローヌスを認める。脳波検査で周期性同期性放電を認める。髄液検査で、蛋白濃度の軽度上昇、麻疹ウイルス抗体価の上昇およびIgGの増加を認める。

この疾患でみられないのはどれか。

- a 除脳硬直
- b 選択緘黙
- c 幻覚・妄想
- d 錐体外路症状
- e けいれん発作

56 28歳の初妊婦。妊娠35週に発熱と下腹部痛とを訴えて来院した。2日前に多量の水様性帯下を認めたが放置していた。意識は清明。身長158cm、体重58kg。体温38.5℃。呼吸数32/分。脈拍100/分、整。血圧130/80mmHg。心音と呼吸音とに異常を認めない。子宮に圧痛を認める。内診所見：子宮口閉鎖、展退度50%、子宮口から膿性分泌液の流出を認める。血液所見：赤血球400万、Hb11.3g/dl、白血球18,000。CRP5.5mg/dl。超音波検査所見：頭位で羊水腔をほとんど認めない。胎児心拍数陣痛図所見：心拍数基線180bpm、一過性頻脈なし、一過性徐脈なし、基線細変動10bpm。帝王切開術を施行した。出生体重2,400g、Apgarスコア8点(1分)、9点(5分)。

この児に最も起こりやすいのはどれか。

- a 胎便吸引症候群
- b 呼吸窮迫症候群
- c 新生児慢性肺疾患
- d 新生児溶血性疾患
- e 頭蓋内出血

57 50歳の女性。廊下に立ってボーッとしている状態を家族に発見され、まとまりのない言動がみられるようになったため、救急車で搬送された。1週間前からかぜ症状と軽度の頭痛とを訴えていた。近医で感冒と診断され解熱鎮痛薬を処方されたが、症状の改善なく、昨夜から激しい頭痛が生じ、数回嘔吐した。意識はJCSでⅡ-30。身長160cm、体重58kg。体温39.8℃。呼吸数24/分。脈拍104/分、整。血圧160/90mmHg。頸部のリンパ節腫脹はない。胸部に心雑音はなく、ラ音を聴取しない。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。下肢に浮腫を認めない。眼底にうっ血乳頭はなく、瞳孔は正円同大、対光反射は両側正常で、眼球頭反射は正常である。明らかな筋力低下はなく、不随意運動も認めない。痛み刺激に対する反応に左右差はない。深部(腱)反射は正常で病的反射を認めない。項部硬直があり、Kernig 徴候陽性である。血液所見：赤血球425万、Hb13.1g/dl、Ht40%、白血球12,000(好中球67%、単球6%、リンパ球27%)、血小板16万。血清生化学所見：AST35単位、ALT44単位。CRP27.0mg/dl。脳脊髄液所見：初圧250mmH₂O(基準70~170)、細胞数980/ μ l(基準0~2)(多形核球970、単核球10)、蛋白403mg/dl(基準15~45)、糖4mg/dl(基準50~75)。

脳脊髄液検査で次に行うのはどれか。

- (1) 細菌培養
- (2) IgG 定量
- (3) ウイルス分離
- (4) 結核菌 PCR 検査
- (5) 沈渣の Gram 染色

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

58 45歳の男性。咳嗽が持続するため来院した。胸部エックス線写真で右上肺野に浸潤影を認める。喀痰の塗抹検査で Gaffky II 号が検出され、PCR 法でヒト型結核菌であることが確認された。

対応として適切なのはどれか。

- a 外来で経過観察する。
- b 外来でイソニアジドを投与する。
- c 入院で多剤併用療法を開始する。
- d 保健所に7日以内に届け出る。
- e 市町村に医療費の公費負担を申請する。

59 23歳の男性。高熱を主訴に来院した。半年前、東アフリカに渡航し、2週前に帰国した。2日前から悪寒戦慄を伴う高熱が出現した。意識は清明。体温39.8℃。呼吸数28/分。脈拍112/分、整。血圧138/74mmHg。胸部に異常所見はない。腹部に肝・脾を触知しない。末梢血塗抹 Giemsa 染色標本(別冊No. 30)を別に示す。

診断はどれか。

- a 黄熱病
- b ラッサ熱
- c デング熱
- d マラリア
- e ウェスト(西)ナイルウイルス感染症

別 冊
No. 30 写 真

60 36歳の男性。夏季に作業のため小麦貯蔵タンク内に入って間もなく意識を消失して倒れ、救急車で搬入された。救出時意識不明でチアノーゼがあった。皮膚は湿潤しており、血管拡張は認めない。体温 37.2℃。呼吸数 16/分。脈拍 108/分、整。血圧 132/90 mmHg。胸部聴診所見に異常はない。血液所見：赤血球 530 万、Hb 16.0 g/dl、白血球 6,000。血清生化学所見：総蛋白 6.8 g/dl、尿素窒素 16 mg/dl、クレアチニン 1.1 mg/dl、AST 30 単位、ALT 32 単位、CK 22 単位(基準 10~40)、Na 142 mEq/l、K 3.8 mEq/l、Cl 102 mEq/l。動脈血ガス分析(自発呼吸、酸素 5 l/分投与下)：pH 7.39、PaO₂ 80 Torr、PaCO₂ 42 Torr。心電図と胸部エックス線写真とに異常を認めない。

最も考えられるのはどれか。

- a 熱中症
- b 砒素中毒
- c 酸素欠乏症
- d 二酸化硫黄中毒
- e 一酸化炭素中毒

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)